唐代回鶻史の研究

緒言

唐代に於る回鶻の盛衰を見るに當り、便宜之を三期に分ちて觀察すべし、第一期は回鶻初代の君長として知らるる特健俟斤の時より、第九代伏帝難の時代の終迄、即ち唐初の頃より、開元の末年頃に至る迄の間を指し、第二期は第十代骨力裴羅懷仁可汗の時より、第二十三代盧駁可汗の時代の終迄、即ち開元末年の頃より開成五年に至る迄の間を指し、第三期は第二十四代烏介可汗以後、即ち會昌以後の時代を指す。

蓋し特健俟斤より伏帝難に至るまでの間は回鶻が突厥の配下より起りて之に叛き、次で薛延陀を倒して唐に歸附し、突厥が骨咄祿及び默啜の時代に復興するや、一部は漠北より逃れて甘州涼州の間に入り、他は尚其の下に屈服したる時代にして、此の間既に自ら可汗を稱するものあり、勢の見るべきもの無きにあらずと雖、要するに漠北諸部の一として勢力を維持したるに止り、未だ曾て此等の諸部を統一するの盛運を作るに至らず、全體の上より觀察すれば興起時代若しくは準備時代とも稱すべき時代に屬す、然るに第二期に入りては其の初代の可汗骨力裴羅の下に、回鶻の勢力は俄然として伸展し、拔悉蜜、葛邏祿の二部と共に、衰殘の突厥を倒し、次で拔悉蜜を滅ぼし、自ら鐵勒九姓の雄長として可汗と稱し、唐よりも之を册して懷仁可汗と爲すに至れり、裴羅の後後嗣者又能く其の勢